卒業生の回想に見る創設期の同志社

露口 卓也	同志社大学文学部教授
講師紹介〔つゆぐち・たくや〕	〔研究テーマ〕 幕末・維新から明治・大正期を中心とした日本思想史の研究

はじめに

本日ここで述べようと思いますことは、一九八六年に同志社社史資料室から刊行されました『創設期の同志社－卒業生たちの回想録』という資料を使って、開校からおよそ二十年ほどの間の同志社という学校のもっていた特徴、といいますより、もっとぼんやりとした精神的雰囲気といったことを窺うところにあります。

はじめに、資料について説明しておかなければなりません。この資料に登場する人物を、卒業あるいは中退の年月順に配列して№を付したのが表１で、語った内容の項目を一覧にしたのが表２です。この表１・２を見ながら聞いていてもらえればいいのですが、収載されている卒業生、といいましても中退している人も少なくないのですが、今はそれを問わないで卒業生と一括りにしておきますが、その数が四十六名（ただし№45・46は同志社に在学していない）で、彼らの証言は露無（つゆなし）文治（ぶんじ）のものを除いて談話であったと思われます。実はこの資料は、愛媛の松山中学に在学中のとき新島らの伝道に感銘を受けて同志社にやってきた松浦政泰（明治十五年英学校英語普通科入学、同二十年卒業。その後女学校の校長などを務め、長く同志社にかかわった人物）が中心になって、大正四、五年ころに採取したものです。松浦はこの資料などを使って『同志社ローマンス』（大正七年刊）という本を書きました。つまりこの資料は『同志社ローマンス』の素材の一つであったのです。表２からも明らかなように、これは一定の質問項目に基づいたインタビュー記事で、同志社教育、キリスト教、教師、寮、運動会、演説会、雑誌など、勉学と学校行事における学生生活に焦点を当てた内容になっています。松浦は、この資料などを元にして当時の学生生活がいかに活き活きとしていたかを述べているのです。『同志社ローマンス』は図書館にありますから、興味のある方はぜひお読みください。ただこの資料の読み方や使い方に松浦と私とでは少し違いがあり、それはかなり重要だと思いますが、そのことを述べていると時間が足りませんからここでは割愛しておきます。

この資料の全体的な特徴を挙げておきますと、表１から分かりますように、証言者の在学年次は開校から二十年くらいの間で、インタビューが大正四年とすれば卒業して短くて二十年、長ければ四十年の歳月を経ての回顧談であること、四十六名という数が同じ時期に在学していた人数（『同志社明治二十五年度報告』にある「同志社創業以来生徒数」によれば、明治八年から二十五年までの男子生徒数の合計は、入学二四三〇名、退学一六一一名、卒業二八三名となっています）からしますとほんの一部に過ぎないこと、しかしこの四十余の人たちは卒業後も教職員や役員として同志社にかかわったり、学生時代に印象に残る人物であったり、濃淡はあるにしても同志社には馴染みの人物であったこと、彼らはおよそ一八六〇年代に生まれた明治の第一世代であり、十代の後半から二十代の半ばまでを同志社で過ごしたこと、つまり彼らの同志社入学は、時代の新知識を求めてであったことなどです。

同志社の英語教育

社会主義者、あるいは英語教育者として名をなした村井知至は、同志社教育の特色として次のような三点をあげています。

「一つはEnglishである。同志社のEnglishは、卒業の人々をして世ニ名をなさしめた所以である。今見る東京あたりの学校の英語をやるのと違ひ、全く教課を英語で以てやったものであったから、自然と英語と云ふものを会得し、其れにひたる事が出来たのである。二つには、英語と云ふものよりも思想ニ興味をもって居た。英書を読んでも、其の思想を得ると云ふ方ニ重きを置いて居た。これは演説などがあると云ふ事もあったが、今一つは先生方の感化があった。（略）三には即ちspilitである。同志社の学生は各人めいめいが日本国家を担って立つと云ふ精神をもって居た。この精神は新島先生から出て来て居ると思ふ。」

英語と思想と精神という村井の言葉を、ここでは英語とキリスト教と新島襄と言い換えてみて、それを同志社の表徴として考えれば、四十六名の証言者たちの精神的境地に重なるのではないかと思われます。村井の言葉を手掛かりにして、以下順に三つの表徴についての証言を聞いてみましょう。まずは英語からです。村井証言にありましたように当時の同志社の授業はどの教科も英語で行われていたようです。

「・・・教科書は無論の事総て英語のを用ゐたのであるが、教場の用語は教師も生徒も総て英語であった。一年の始まりから訳読を除く外は、数学も歴史も地理も総て英語でやったものである。暗算すらも英語でやった。当時、教師は西洋人と日本人と殆ど半して居ったが、日本人も皆英語で教へたのである。」（岸本能武太）

「始めっから課業は一切すべて英語でやらされた。教室では少しも日本語を用ふ事が出来なかった。」（村上小源太）

「授業時数は今日と異って精々一日に三四時間であるが、各学科目総て英語で最初からやるのであるが、全部下調べが入（ママ）るのである。」（三宅驥一）

しかもその英語は教師が丁寧に教えるのではなくて各々が自習しなければなりませんでした。「注入主義」ではなくて「開発主義」なのです。よほど印象的であったのでしょう、次のように幾人もの証言があります。

「同志社の教育法は、注入主義では無く開発的であった。生徒は先生から学ぶと云ふよりも各自研究である。」（三上真吾）

「すべて開発主義で、教場に於て先生に学問を教はるのでは無くて、勉強は各自出来るだけして、先生は唯導き手であったばかりである。」（山本徳尚）

「実際同志社では先生から教えを受けたのでは無く、総て自習で、辞書と首引で下読みをして行く。教場では習ふとい云ふよりも勉強の為所は寄宿舎であった。」

（森次太郎）

「同志社の教育は先生が決して手を取らないで、皆な自分ニさせた。自動的になしたもので、従て個性が比較的発達したのである。」（留岡幸助）

初等・中等教育がいまだ整備されていない時期でありましたし、また英語に触れる機会など、さほどというよりほとんどなかったのですから、学習の苦労は並大抵のことではなかったでしょう。

「私は郷里に於て中学校卒業間際迄勉強し、続いて漢学を専攻する等、彼（あれ）や是（これ）やで歳月を費した為、英語を学ぶ事は寧ろ晩学の方であった。同志社に入学後、殆ど全力を挙げて英書の研究に傾倒し、先づ英書を読むには英字を知る事が最大急務と心得、（略）毎日毎日新語を記憶する毎に必ずノートブックに記載し置き、毎夜寝に就く前瞑目して新語を暗誦した。（略）又、翌朝読書に懸る前、昨夜の新語を暗誦し、無事に及第して後其日の新課業に移り、再び前日の通りを繰り返すのである。」（池田寅次郎）

池田のような人はたくさんいたでしょう。草創期の同志社の教師陣は熊本からやってきた人たちが卒業して教壇に立つようになるまでは日本人は新島くらいで、ほかはデイヴィス、ドーン、ラーネッド、テーラー、ゴルドン、グリーンなどアメリカ人宣教師でした。彼らは日本語がしゃべれませんから学生の方はたまったものではありません。でも池田のような苦労をすることで、逆に英語力がついたことも確かでした。ケーデーという教師は英語教育に厳格で、だから随分と鍛えられたという証言が二、三あります。文明開化の世にあって英語は西洋学を習得するための技術であり、社会に出たときの武器でもありました。新時代に向かおうとする青年たちの熱気と要望とに支えられて同志社の英語はありました。

英書をテキストにする開発主義教育は、英語力を育てると共に自主性をも育てました。教場での教師との議論が盛んであったという証言は多いのです。特に同志社入学以前から修練を積んでいた熊本バンドの人たちは、教師に盛んに議論を吹っかけていたようです。標的になることが多かったのは日本語の分かる新島でした。

「教場にて教を受くるにも中々音なしく受くる事がなく、少しく教師の教へ方ニ不審があるか欠点があるかを見出さば、忽ちこれを咎め、遂究して止まなかったのである。当時、新島先生より福音書の調和ニに就て教授になって居たが、元来福音書は頗る面倒なものであって、（略）先生も頗る当惑して居られた。先生は当時、アルフォードの註釈を一つの楯として教場ニ臨まれて居たが、生徒がそれを知って忽ち其の本を読み、且つ他の注釈書を読んで、いろいろの議論をもちかけなかった事はない。」

（小崎弘道）

「生徒の中には突飛に出来る者もあったので、先生も閉口したらしい時もあった。解釈の間違ひ、咎め合ひで、自由の意気が教室内を極度迄に発展させて実に愉快であった。」（蔵原惟郭）

熊本バンド以外にもその種の証言として、

「私は始、新島先生から米国のヘブンの心理学を習った。（略）ミルの哲学とは反対だったので、新島先生と大いに議論を戦はした。あまりに議論が喧ましくなって、終に新島先生も困られた。」（中島力造）

「先生を困らす為めに図書館で非常に皆勉強をした。教科書に無い事を勉強して、教場へ出てむづかしい質問を提出しては先生を凹ました。」（山本徳尚）

というのがあります。新島の困った顔が浮ぶようです。教授スタッフ、カリキュラム、教授法、テキストなどの未整備がその要因にあったのですが、原書主義、開発主義というやり方が学生たちに内容に対する関心を高め、英語という言語だけでなくその思想にも興味を抱かせたのでした。それはまた、右の証言からも推測できますように、神学を中心に据えた教育方針がその背景にあったからでもありました。そこで次に二つ目の表徴でありますキリスト教に移りましょう。

同志社のキリスト教教育

露無文治は、岡山の学舎で漢学を修めていたときに『時事新報』の新島の記事を読んで渡米の志を抱き、「将来漢学のみではトテモ十分社会に活動することは出来ぬ、洋学を修めなくてはなるまいと強く自ら感じ」ていた、同志社出身で天城教会で牧師をしていた亀山昇に会いその志望を語ったところ「それなら此九月から京都同志社に入学せよ、同志社に往ったら半ば洋行したも同様である、何となれば、同志社の牧師中には多数の博識篤信なる外国人が親切に英語其他の学科を教授して居られるから」と勧められて明治十七年に同志社にやってきた、と語っています。また、のちにキリスト教社会主義者として名をなす岸本能武太は、当初工部大学に進む希望をもっていたが学費のあてがなかった。厄介になっていた義兄はキリスト教に関心が深く仲間と時々集会をしており、その下足番をしていた岸本は「私は基督教の事は判ら無いので、人が英語のバイブル等を習って居るのが羨ましく感じ」ていたところ、義兄から同志社ならば学費を出してもよいと言われ「同志社が基督教の学校であるので多少何となしの躊躇の気味はあったが、兎も角他郷に踏み出して勉強して見たいと云ふ考へがあったから、私は直ちに遣って下さいと云ふた」、というのである。のちに牧師として伝道に従事した吉田清太郎も「私が同志社ニ入学した目的は、実は工部大学に入学の準備の為めであった」と述べています。創設期の同志社に入学してきた人たちの中には、露無や岸本、吉田のように、同志社がキリスト教の学校であることに多少の躊躇や抵抗を感じながらも、渡米・洋学・工部大学・英語に象徴化されている西洋文明の修得を目指していた人が少なからずいたと思われます。もちろんキリスト教も西洋文明の象徴に違いはないのですが、近世以来の「邪教」のイメージは若い人たちの心にも染み込んでいましたから微妙な感覚を起こすのでした。

「私は宗教に興味を持って居らなかった故に、政治か学問の方を勉強し様と云ふ考へであったので、同志社に長く止って居っても自分の目的が達しられ無いと思った。それが為に一二年で退社して東京へ行った。私は其頃未だ十代の生意気盛りの時であったから、社生の多数が宗教臭いのが気に入らなかったので、早く都合して他に行かうと思って居ったのである。」（中島力造）

「同志社はクリスチャンエジケイションであったが、無理に基督教信者になれとは勧誘しなかったので、自身随意であったから、十中の二は基督教信者にならずに卒業した。現に大臣秘書官某氏は、『己れは基督教は大嫌ひだ』と押し通し、七八年も在校して居られたが到々信者にならなかった。」（吉川潤二郎）

当時の同志社はキリスト教の気風が濃厚で、実際、授業、祈祷、礼拝、安息日、日曜学校、教会、伝道、演説会その他の行事があり、キリスト教の空気はおのずと学生たちを支配していました。西洋学を早く身に付けて社会に出ようとして入学してきた人たちにとって同志社が「宗教学校」として認識されるのは当然でした。

それでもキリスト教に素直に接することのできない者も、学生生活を送るうちに徐々に受け入れるようになります。岸本は次のように言っています。

「私は同志社に行く事になったが、始めは基督教が何となく厭ひで、又、日曜日を守ったり祈祷をしたりするのが窮屈で馬鹿らしく、こんな学校には居りたく無いと思ふ事もあった。漸々と学校の空気に慣れ、又、基督教の悪るいもので無い事が判ったので、続けて学校に止まって居った。（略）一方は基督教義に判らぬ事が多かったと云ふ事と、又一つには、当時基督教になる事は、何時何処から迫害を受けて命を取られるかも知れぬと云ふ心配を子供心に感じたので、基督教を信ずる為めに死んでもよいと云ふ決心が出来なかった・・・。」

当時のキリスト教に対するイメージを髣髴とさせてくれます。その岸本も自分を振り返って次のように語るのです。

「私は殆ど偶然の如くして同志社に行ったので、自分が工部大学に這入らうと思って居った目的から云へバ、今日でハ御門違ひの生涯を送って居る訳であって、時には自分の専門を危（ママ）まったのではあるまいかと思ふ様な事が無いでも無いが、それだからと云ふて、余の過去の歴史を遣り直したいとは思って居ない。（略）自分としては、出来るだけ良い満足な道を歩るいて来たと信ずる。同志社は私の為に建てられて、私の為に教育をして呉れ、又基督教を伝へて呉れたのである。」

学生たちのキリスト教に対するスタンスは、右は「基督直参」（留岡幸助）から、左は「基督教大嫌い」まで幅広くさまざまでしたが、キリスト教は同志社の生活と共にありましたから、受容するにせよ拒否するにせよ、学生たちにとって内的な基軸となっていたと思われます。洋学の習得と渡米の志をもって入学をしてきた露無文治は、同志社生活を送るなかで、

「ある日、独机にもたれておったら、何か云ふにいへない不可思議な一種の霊感にうたれ、其時から心機一転、双肩の重荷がおり、心にかゝる疑雲が一掃せられ、まことに光風（こうふう）霽月（せいげつ）の思いがして、天空の月も自ら新たに、花を見ても鳥を聞いても、事々物々神の栄光を現はさゞるはなく、罪の束縛を脱して真の自由と喜悦にみたされた。（略）不思議にも其時から、基督の神の子たること、聖霊の感化、聖書の意味がより明かに分るやうになり、人の言の判断が出来るやうになって来た。祈祷会に出席しても、最初は公衆の前に祈らずして、帰途御所園内の大銀杏樹の下に、独静に心ゆく祈祷を捧げておったが、一度思切って教会にて祈って後は、公衆の前に祈ることが出来るやうになった。三十年来祈祷はわが生涯の力である。」

という回心とでもいうべき精神的な転位をすることになりました。

明治十七年三月、学生の間にリバイバル（信仰復興）が起こりました。連日連夜、祈祷や信仰告白などが校内のいたるところで繰り広げられた興奮は、授業に支障をきたし、学生の中には身体に変調を覚えるものが出るなど、教師側はむしろその沈静化をはからなければならないほどでした。傍観者であった安部磯雄は、そのときの一つの有様を、

「其の時の光景は実に今でも眼前ニ浮ぶが、礼拝堂ニ居るものは皆な声を上げて祈って居る。処が向ふを見ると、壇上には綱島君が中央ニ坐を占め、其の左右に二三人黙祷して居る。下の方には十四五人許腰掛けて居た。其の中には上級生も居るし、神学部（ママ）の人々も居た。綱島君が其の時は気が変ニなって、自ら基督になった様な気分らしかった。そして綱島君は手ニ竹の棒をもって、早く悔ひ改めよ、五分もすると天国の門が閉ざされて終ふからと、非常な勢をもって言ふて居る。人々が祈って居るのは、却て綱島君の為めであったのである。そして綱島君は一人ひとりよび出して祈りをさせる。其れがよかった人は壇上に引き上げる。其の時、私は不思議ニ思ふたのは、綱島の親友であったものを一人、汝偽善者よと云ふて、非常ニ打った事があった。」

と述べています。リバイバルは特殊で一時的な現象ですが、当時の同志社にはこういう興奮状態が起こりかねない素地があったのでした。

「私共の級には非常に熱心な宗教家も居って、此人達は将来立派な宗教家になりたいと云ふのが目的であったので、私共も非常に勧められた。今日友達の中には伝道師になって居るものが多い。」（村上小源太）

「同志社の教師の大部分は米国の宣教師で、多くはニューイングランドから来て正（ママ）教徒主義を鼓吹して居た。其結果ピューリタンリズム或はストイックの精神を養成された。」（三上真吾）

「新らしく入学した生徒は、暫らくすると皆な校風ニ化せられて終ひ、たとひ頑固な人でも五年生ニなる迄にはきっと感化されて終ったものである。松浦君の卒業する頃には、互ニ欠点指摘して改心を促すと云ふ事をした。麻生君などは非常ニ勉強して、涙ながら文明史を勉強したものである。」（吉田清太郎）

創設期の同志社は明確に伝道者養成という目的をもっていました。アメリカの組合教会からの多額の基金で運営されていたのですから、当然そういうことになります。運営方針としてそういうことがあった上に、キリスト教は西洋文明の精神であるという一般的な風潮も重なって、同志社の気風が醸成されていたのでした。学生たちがキリスト教を受容していくようになるのも当然のことでした。ですけれども、実業社会に出ていこうとして勉学に努めていた学生たちにとって、伝道者となることはやはり距離のあることでした。明治十九年に英語教師として赴任してきた清水泰次郎は、

「当時同志社では、熱心なる基督教信者となって伝道に身を献げねばならぬと云ふ事を大に奨励し、学生も亦牧師、宣教師になる事を己れの天職と考へて居たのである。私独此目的と方針を捧持して居る同志社の全空気の中に立って、我国の将来を想ひ、唯立派なる伝道師を出したのみにては日本の運命誠に危く、同志社より他方面に活動し得る健児を排（ママ）出し、殊に実業界の雄者を育成する事は目下の急務にて、学生にも此思想を大に吹き込んだのである。斯る故に今日実業界に知名の士を同志社より生まれしめたのは、実に慶賀の至りと言ふ可きである。」

とやや誇らしげに語っていますが、実業界を背負うような人物を育てるための教育の必要が、伝道者養成との間で軋みを生じている様子が窺えるのです。学生たちが社会に出ていくときに、伝道か実業かという二者択一の問題として問われることはなかったのですが、実業に強い執着のあった学生にとっては同志社の「宗教」は束縛として感じられたものと思われます。言い方を変えますと、それは英語か、それともキリスト教か、という価値の分岐が起こっているといえましょうか。そのような軋みを抱えながら、それでも亀裂が生じることがなかったのは新島がいたからでした。創設期の同志社に実業と伝道、英語とキリスト教という二つの方向を一身に体現した存在が新島であったからです。そこで次に新島に移ります。

同志社の人格教育－新島襄の存在

新島の永眠は明治二十三年一月ですから、『創設期の同志社』に登場する学生の大半は、程度の差はあるでしょうけれど新島その人を見ることができました。見るばかりでなく言葉

を交わした人も多かったのです。彼らは同志社生活のさまざまな場面での新島を眼にしているのですが、その人柄についての感想にさほど違いはないように思えます。

彼らの証言の中で印象的なのは、新島がよく涙する人であったことです。そのいくつかを挙げてみます。

「新島先生はいつも朝の会には出席せられた。外国ニ行かれた時の外は、必ず出て話をせられたものである。そして其の話が又涙と共にせらるゝと云ふのだから、非常ニ感じたものであった。」（松尾音次郎）

「今殆ど死体に鞭うつが如き、悔悟者に対って罰を加はへるのは、男子の真面目を有せ無い者である」「今後も斯う云ふ様な男子の無い事を祈るのであると、殆ど眼縁に涙を浮べて、其席に先生は復せられた。」（横田安止）

「先生は非常ニ喜バれて、涙を流して私ニ握手を求められ、そして其の決心を激励せられた。」（綱島佳吉）

「その時先生は泣いて居られた様ニ思ふが、何故に泣かれたか分らなかった。」

（吉田清太郎）

横田証言は校則違反で処罰された者に対する誹謗の落書きがあった際のことであり、綱島証言はクラスの演説会で自ら伝道に身を捧げることを表明した折のこと、吉田証言は市原盛宏の演説を聴いているときのことです。新島の涙を見た人はそのほかに幾人もあり、新島は学生によく涙を見せる人であったようです。そのような新島の情感はまた説教や演説にもあらわれます。

「新島先生は明治の偉人である。同志社には金森、浮田、市原等の雄辞家の諸先生が有って、演説でも説教でも堂々たるものであった。然し此演説若しくは説教を聞いた後、学生が如何なる感を持つかと云ふと、露骨に言ヘバ学生は寧ろ批評の位置に立ちて、諸先生の演説又は説教を彼是批判するが、新島先生の演説説教に至ると、諸先生の如く雄辞と云ふのでは無いが、言々肺腑より出で、語々至誠迸り、学生は咳払ひする者さへ無く、誰も随喜の涙を流した。此一事は到底他人の企及する事の出来無い点であらうと思ふ。」（池田寅次郎）

この池田の証言は、新島の説教や演説が決して上手でもなければ雄弁でもないが、「明治の偉人」としての情感の溢れたものであったというのです。学生たちの新島の受け取り方がどのようなものであったかがよく分ろうというものです。また、村井知至は、市原盛宏は「Eloquent speaker」（雄弁家）、上原方立は「Vehement speaker」（熱弁家）、そして新島は「Honest speaker」

つまり誠実な弁論者だと言っていますが、これも池田のそれと通じていると思います。新島の学生に対する応接は親密かつ懇切でした。しばしば自宅に学生を招き対話の機会を作ったり、時には欠乏している物品を与えたり、生活費の心配までしていました。時代もあったのでしょうが、何より新島には学生と対等に向き合う真摯さがありました。

「嘗て自分の級に面白からぬ事が起ったので、或早朝に、上原方立と一所ニ先生の門を叩いて其の事件を述べた。処が先生は非常ニ心配せられ、顔色をも替へられたので、これからは先生には一寸した事は申上げられない、自分達で処置しなければならぬと思ふた事がある。」（綱島佳吉）

「かつて私の級で、学校ニ向って改革を起した事がある。（略）然しとも角行って先生ニ会ふて、其の主義を申述べた。主意は、日本はこれから支那提携を国是として大ニやらなければならぬではないかと云ふ様な事であった。然るに先生は、其の申出を聞かれて大ニ賛成を表せられ、それは君等がやって呉れなければならぬではないかと云ふ様な事を言はれて、閉口した事がある。要するに先生は決して生徒を圧迫しないのである。」（吉田清太郎）

新島は、学生たちの意を汲んで同じところに立って考えようとする人なのです。それだけに、そういう新島を頼りないと感じた人もいました。市原盛宏に一時心酔していた岸本能武太は、その代講をした新島を次のように思ったというのです。

「種々質問して見ても明白な満足な答を得ないで、新島先生よりも市原先生の方が偉い（と思い）其後は新島先生に対して自然に信用の幾分を減じて、今日迄そんな感じの続いて居るのは甚だ不幸な事と思ふが、是も事実であるからしかたが無い。要するに新島先生は頭脳明晰と云ふ方の人ではなかったと、私は今も信じて居る。」

新島の授業について、困らせたという証言は多いが感心をしたというものはありません。学生たちにとって新島先生は、強いリーダーシップをもった人、あるいは明晰な理論をもった言論人という風貌ではなく、しばしば涙を見せ、語々至誠迸るHonest speakerであり、決して生徒を圧迫しない、「何だか自分に一種の高尚な気分と、揮って出来るだけの努力をして見たいと云ふ元気が移された様な感をもった」（深井英五）ような人物として造形されていたのです。新島は「至誠の人」（吉田清太郎）であり、また「同志社の調和者及基督教の調和者」（蔵原惟郭）でありました。

とは言いながらも、一方では先ほどの池田寅次郎が言うように「新島先生は明治の偉人である」という相貌を、学生たちは確かに抱いていました。

「先生ニ向って、先生の志と云ふものは変りはしないか、私共は替ったりする恐れがあると。と云ふたら、米国ヘ行って信者ニなった時、欧米の文明はChrstianityニありと信じた。故ニ一巻の聖書を以（ママ）て帰へって伝道する事が出来れば幸であると思ふた。岩倉その他の一行が巡視せられた時には、基督教と学術と加味したものであると思ハれた。初め日本ニ在る時は、日本を救ふには海軍にありと思ひ、航海術ニありとした。然し西洋文明の基礎が分らないとして海外ニ出て行かれた。凡て、国家を救ふと云ふ一念から来て居るのである。」（吉田清太郎）

ここにありますように、愛国心と信仰、航海術と聖書、学術と基督教という二つのものが国家を救うと考える新島は「国士」でありました。国禁を犯し単身脱国して、十年に及ぶアメリカ生活を送り、帰国して同志社を興し、その新知識をもって青年教育を行なっている人物に抱く思いとしては自然なものでありましょう。「国士」新島という像は、おそらくすべての学生に抱かれていたものでしょうが、とりわけ同志社の宗教的雰囲気に距離を感じていて実業世界への望みを持していた学生にとっては、より強く意識されていたと思われます。

「新島先生には非常に親しくして、先生の家にもよく遊びに行ったことがある。御互ひに日本人だからよく言葉も通じたので、一番親しく語った。（略）其時日本の将来に就いて、又宗教の事に就いて等語り合った。宗教に就いては新島先生は自由思想を持って居られたので、国家の将来を大に憂へて居った。私も同感であったから深く語った。宗教の主義は確く取ったが、併し何の宗教で無くてはならない等と云ふ様に一方に偏する事は無かった。」（中島力造）

「私は他人と多少意見を異にして居た。殊ニ宗教には考へが異って居た。故に時としては友人などから攻撃を受け、又排斥せられんとした。先生丈けは、主義又は意見の異なるは止むを得ない、余り人を毛嫌ひするのは真の教育の主義ではない。人々各々長短あり、異なる処あるから、平等にまっ直ニ教育しなければならぬと云ふて教育された。教育は教育、主義は主義として、私の如き異主義のものをも寛大に入れられたのは、実に今ニ感銘して居る処である。」（松波仁一郎）

「国士」新島のイメージは、吉田のように宗教と固く結びついていようと、小野や中島、松波のように宗教と距離をとろうと、どちらにも抱かれていたのでした。そしてその際に留意しておかなければならないことは、宗教と実業とを切り離してはならないということです。宗教と一線を画していた松波が、

「何と云ふても新島先生である。私は種々様々の先生に出会ったが、新島先生ほど先生と思ふ方はない。実際ニ教はったのは極めて少いが、身体中の先生と思ふ。」

と言うとき、実のところ、その新島像には宗教の裏打ちがなされていたというべきなのです。同志社の宗教意識は新島を通して学生の内面に刻印されていたのです。確かに創設期の同志社の学生には宗教かそれとも実業かという軋みがありました。しかしそれは別の言い方をしますと緊張感とでもいうべきもので、宗教と実業とを切り離してしまえば当時の学生の精神状況の実相を失うことになりますし、両者を併せもつところにこそ創設期同志社の特徴があるというべきなのです。宗教か実業か、ではなくて、宗教と実業と、ということが最も肝心な点なのです。これを切り離したときから少しオーバーな言い方をしますと近代の苦悩もまた始まるといってよいのです。その意味でも新島の存在は大きかったと言えましょう。最後に、のちに日本銀行総裁になった深井英五の証言をあげておきます。これは今日お話をしたことの結論と言ってよいでしょう。

「始めに先生の言はれた事がある。学校を卒業して、如何にして就職しやうかと云ふ事を考へるのは、抑々（そもそも）末（すえ）である。人間は自分を修養して置きさへすれバ、為す可き仕事は何処に行ってもある。自分を修養して、世間の為めに何うしたらよいかと云ふ事を考へさへして居たらよい。就職等といふ事に齷齪（あくせく）する様な考へで勉強してはいけ無いと云はれた。」

二〇〇六年十一月八日　同志社スピリット・ウィーク「講演」記録